

人と物

—— 人間論の観点から ——

渋谷 寿

Man and Things

From the Principles of Man

Hisashi SHIBUYA

緒 言

人間は太古の時代から、物質的世界を探索し、道具をはじめとして様々なものを創造し、今日の物質文明と言われるものの豊かな文明を築き上げてきた。しかし、太古の時代の遺物を観察すると、そこには必ず物質に対する、精神的世界の人間の探索の歴史を見ることができる。つまり、人間は太古の時代より、自分達の願望・祈りをものを通して表現し、さらに、人間存在の意味・宇宙の秩序・真・善・美といった高次な内容へ探索を深めてきたのである。このように、我々の文明は物質的側面と精神的側面という二面のかかわりにより形成されてきたと言えることができる。

では、今の我々の文明における、物質性と精神性はどのような関係にあるのだろうか。人は今、あらゆるものに囲まれ、一見快適で便利な生活を送っているように見える。しかし、この物質優先の文明の裏に様々な問題に苦しむ人々が存在している。また、ものを生産する為に、気候までも変化させる程の地球規模の自然破壊が進行している。このように現代文明は、人類存亡の危機状況と言っても良い程の、人間を不幸に導く大きな問題を次々と生み出しているのも事実である。これは明らかに、我々の文明を築いてきた道程の誤謬を示している。今、ものは人を出口のない混迷へと導いているように思われる。

この、混迷の現代文明という必然的結果を生み出した原因について、アレキシス・カレル¹⁾は、ルネッサンス以来の、人間に関する科学的側面と人間論的側面の知的誤謬について、まず、科学技術が、間違った形而上学的観念によって人間を造り上げたという点を指摘している。科学は計測可能な一時的性質と計測不可能な精神的な二次的性質を区別し、後者を忘れた結果が、現代のゆゆしき現状を生み出したと言うのである。さらにカレルは、デカルトが身体と精神の二元論を打ち立てるに至り、物質が決定的に精神から引き離され、人体の有機的構造、生理的機能が、精神の快・苦・美といった要素よりはるかに重視された事実を指摘している。そして、この間違いから、我々の文明は科学が勝利へ導き、一方で人間を頽廢に導いたと断定している。このようにカレルは、文明・科学・人間に関わる問題において、人間の精神的側面より物質的側面が重視された結果が、現代文明の根本的誤謬であることを強く訴え、今まで欠如してきた、人間の精神的領域の問題を科学の精神にのっとって研究する必要性を求めているのである。

そこで本論では、人間論を媒介として、人間の持つ精神的側面と物質的側面との関係を探り、

さらに、人との調和するもの創りの方法論を明らかにしたいと考える。

人間論における三分説

混迷の現代文明における根本問題は、アレキシス・カレルによれば、我々の、人間に関する根本的無知にあった。この、人間の本質については、古今東西、様々な分野で探索がなされてきたが、世界に存在する様々な人間論は、幾つかの主流の考え方が、それぞれの地域的・文化的・時代的・背景のもとに、樹木の末枝末葉のごとく細分化されている。その結果、ここ数千年の人類史を通して、我々は人間の本質についての統一的な知識・明確な論考を持っていない。つまり、人間に関する統一的な知識は今だ未熟なものであり、カレルがいみじくも著書に付したタイトル『人間この未知なるもの』のごとく、我々は自分自身のことすらその本質を理解していないと考えられる。また、ラダクリシュナンは人間論における根本問題を次のように指摘している²⁾。現代の最大の問題は、人類存亡の危機をいかにして乗り越えるかであり、どの国民・どの宗教・どのイデオロギーが勝つかということは問題ではないのである。彼はさらに、この問題の解決の方法について、今必要なことは人間の目的を明らかにし直すことであり、国家や経済もその内奥の理念に立ち帰り、その魂をとらえなおさねばならないと続けている。さらに、あらゆる文明は、ガンジーが見い出した「真理と愛」という道徳的原則が基礎となることにより救われると結論付けている。この考え方から明確になることは、現代の混迷が、人間に関する無知による、人間の物質的欲望から生じていることと、この危機的状況を解決する方法は愛より生じるということであろう。この、「欲望」と「愛」の関係を明らかにし、二者を道徳的にコントロールできれば、現代文明における問題への解決の方向が見出し得るのではないかと考えられる。その為には、人間の本質に関する考察が不可欠である。ラダクリシュナンが言うように、様々な人間論におけるイデオロギーの勝負が問題でない以上、また、すべての人間論を分析することは不可能であるという事実より、本論では、幾つかの人間論について、それらの底に流れる考え方の類似性を探るというソフィア的アプローチにより、三分説の人間論に着目したいと考える。

人間は「肉体」・「魂」・「精神（霊）」から成ると見る三分説の人間観は、ルドルフ・シュタイナーが近代、精力的な展開を試みたが、この考え方は、古代エジプトや古代ギリシャ、さらに古代中国の人間観にも基本的な類似性を見ることができる。西洋における三分説の人間観として、まず古代エジプトについて考察してみよう。エジプト文明は、宗教的な独特の文化・芸術様式を生み出したが、その背景には人間を、肉身セト Set、及び精霊バ Ba、更に肉身の幽体であるカ Ka と3つに分ける人間観が存在していた³⁾。当時の人々は、Set は地上に属するものであり、Ka は天に属するものと考えていた。そこで彼らにとって人間の死は、地上での Set の死を意味し、この Set を保存するという物質的条件を満たすことにより、天に属する Ka は永遠に生きられると考えたのである。彼らの人間観を構造的に表わすと図1のようになると考えられる。このように、古代エジプトでは明確に三分説の人間観が形成され、これは、天に属する、人間の本質部分である Ka の不

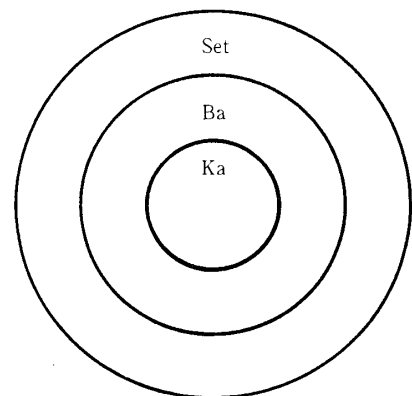


図1. 古代エジプトの人間観

死説という、東洋的転生論に通じる考え方を合わせ持っていたのである。

次に西洋哲学の代表として、古代ギリシャの人間観についてジョン・D・ワイルドの考え方⁴⁾に添って考察してみよう。ソクラテスは、ソフィストのとらえた物質主義の人間観に対して、新しい魂の理論を確立した。彼が規定した魂とは、人間の人格を支配する主要部分であり、様々な事物の不変の形相を適格にとらえて合一化を可能とする。ソクラテスは、この働きを文明の基礎となる知識の源だと考え、それ故、人間の様々な能力の中で、魂のこの能力が最も貴重なものだととらえたのである。プラトンはソクラテスの基本的洞察を継承したが、最も重要なことは魂の不死性を強化したことであろう。つまり、プラトンが考えた魂は、永遠的な生を、転生を通して生き、様々な身体を経験しながら自分の生き方を選択していく。怠惰な魂が無知により、誤まった選択をすると低次の生に転生し、その結果を受けることになる。他方高次の能力を駆使し賢明に生きる魂は、より高次の次元に転生し、ついには肉体的生の転生から解放されて、肉体なしで形容もできないようなずっとすばらしい住家で生きることになる⁵⁾。このような、魂の絶対性・転生に関するプラトンの主張は、東洋の仏教的転生論とほぼ同一のものであると言える。プラトンは、自分自身について正確で確実な知識によってのみ、人間は真の幸せに到達すると考え、この洞察を深化させ、人間の本質、つまり魂を3つの異なる部分に分けて分析した⁶⁾。

1つは、理性的洞察に先導される希求（現代的にいえば意志）、2つめは想像される期待と恐怖に先導される気概、3つめは感覚や近視眼的想像力に先導される欲望である。つまりプラトンは、魂を事物の不変の形相を判断できる理性的部分と、様々な感情・感覚に揺れ動く気概的部分、そして悪の概念に近い低次の欲望の部分で成り立つとしている。プラトンは人間の心身問題の解決に、明確に肉体と魂という二元論をとるが、魂を絶対的普遍の部分・流動的変転の部分・物質的現象の部分という3種類に分類すると、気概と欲望の部分が一まとまりとなり、図2のように実質的に三分説の形が成立する。

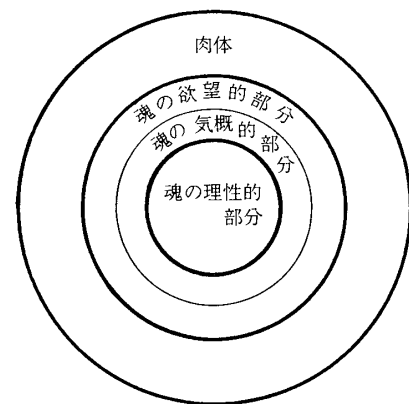


図2. プラトンの人間観

1つは、理性的洞察に先導される希求（現代的にいえば意志）、2つめは想像される期待と恐怖に先導される気概、3つめは感覚や近視眼的想像力に先導される欲望である。つまりプラトンは、魂を事物の不変の形相を判断できる理性的部分と、様々な感情・感覚に揺れ動く気概的部分、そして悪の概念に近い低次の欲望の部分で成り立つとしている。プラトンは人間の心身問題の解決に、明確に肉体と魂という二元論をとるが、魂を絶対的普遍の部分・流動的変転の部分・物質的現象の部分という3種類に分類すると、気概と欲望の部分が一まとまりとなり、図2のように実質的に三分説の形が成立する。

プラトンは魂の中でも特に理性的部分のみが、人生を自然本来の目的に導く資格があると主張する。なぜなら、自発的希求が、自然や徳に関する普遍の形相を把握する理性的洞察に導かれるならば、この洞察は感情を制御し、理性と気概が一体となって物質欲に規律と秩序を課することができるからである。よって人は理性的な人生を歩むこととなる。このように、プラトンの人間観では魂における理性的部分が群を抜いて重要である。図2における中央にある理性的部分は魂の寡頭制的体制の中核であり、最も高次のものである。それ故、次に低次の気概的部分に影響を与えることができる。この、理性による寡頭制的体制が崩壊すると、すべては同等となり従属関係が一切無となり、非理性的な肉体的欲求が支配する人生となるのである。つまり、プラトンは人間の最も高次の部分が図2の中央、すなわち魂の理性的部分であり、それが正常に機能するならば、一段階低次の気概的部分、さらに低次の欲望的部分、そして最も低次の肉体的部分に影響力を持って、人間の行動をコントロールすることができると主張するのである。彼は、このような、高次のものが低次のものを支配することを正義と規定するが、プラトンにとって人間の理想像は、人間が理性に従い、正義を行い有徳的な人生を生きることにあ

とも言えるだろう。そして転生を通して、この有徳的な行為により魂が清まった段階で、人間は最終的幸せに到ることになるのである。これは東洋における解脱・悟りに他ならない。

次に、プラトンの超感覚的認識を現代に復活させたルドルフ・シュタイナーの人間観について上松佑二の考察⁷⁾と『神智学』にそって考えてみよう。アリストテレス以来、ヨーロッパでは、神的・精神的なものは人間には到達不可能であるという伝統的キリスト教教義による思想が定着していたが、シュタイナーは20世紀初頭のヨーロッパで、プラトンと同質の人間論を展開した。すなわち、人間は肉体と魂と精神（霊）から成立するという三分説の人間観を明らかにし、さらに精神は輪廻転生し成長するという東洋的な精神の不死説を強く主張した。人間は肉体と魂とから成立し、精神は神の領域だと一般に考えられていた当時のヨーロッパでは、シュタイナーの精神科学的な思想はすぐに受け入れられるものではなかったが、人間の三分説と、神的・精神的なものの因果律としての転生論とともに現代社会に徐々に受け入れられる状況になってきていると言えるだろう。

シュタイナーは人間を「肉体」「魂」「精神（霊）」の3つの部分より成ると主張する。上松は、その内容を次のように説明している。『人間の肉体は死体としての「物質体」と、生きた肉体を死体から区別する「エーテル体（生命体）」と、快や不快、欲望や運動、感情や意識などを司る「アストラル体（感覚的魂）」の3つから成っており、魂は肉体に最も近い「感覚的魂（アストラル体）」と、思惟がこれに加わる「知的魂（自我）」と真や善に関わる「意識的魂（精神自我）」の3つから成っており、精神は知的発展や感情・意志の洗練・浄化などによって変革されたアストラル体としての「精神自我（意識的魂）」と宗教体験や芸術体験によって変革されたエーテル体としての「生命精神（ブディー）」と、自我によって変革された物質体としての「精神人（アートマン）」の3つから成っている⁸⁾。これを図3に示した。このように、「肉体」「魂」「精神」は、それぞれがさらに3つの部分により成っているが、シュタイナーは『神智学』の中で、現代人は「魂体」と「感覚魂」、及び「意識魂」と「霊我」（図3においては、「アストラル体」と「感覚的魂」、及び「意識的魂」と「精神自我」に相当する）がそれぞれ同一であると述べている⁹⁾。その結果、人間の本質は「物質体」「エーテル体」「アストラル体」「自我」「精神自我」「生命精神」「精神人」という、自我を中核とした7つの部分から成っていると説明される。シュタイナーによれば、人間の高次な部分は自我を中央に置いて低次なものを変革させることにより形成されることになる。プラトンとシュタイナーの人間観は、三分説において共通のものであるが、プラトンは、より高次なものが低次なものを支配するという寡頭性的考え方において、最も高次な理性的部分を重視するが、シュタイナーは低次なものを変革すると高次な部分が形成されるとし、高次なものを生み出す為の媒介としての自我を非常に重視するのである。シュタイナーは「肉体」「魂」「精神」の関係について次のように説明している¹⁰⁾。

人間の精神（霊）は2つのものを自己の内に担っており、その1つは真・善の永遠の法則であり、2つめは過去の

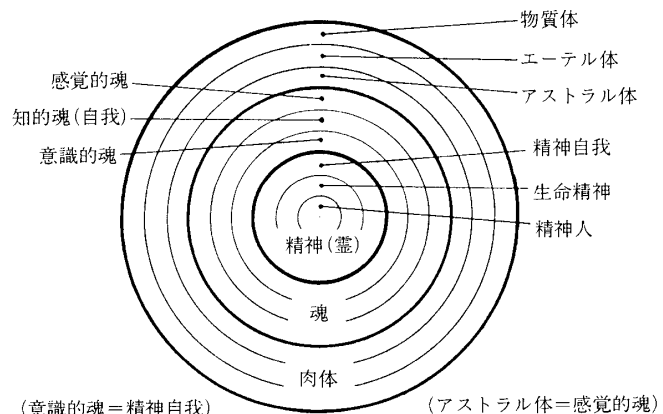


図3. R・シュタイナーの人間観

諸体験の記憶である。つまり、肉体を通した人間の行動を魂は過去の保存者として記憶し、霊に提供する。霊は、それ自体、永遠なものが顕現しており、それに過去の記憶が加わり、「私」は真理を霊的に把握できることになる。そして霊は摂取された諸体験を通して成長するのである。この考え方は東洋の唯識論における阿頼耶識アラヤシキの働きとほとんど同一のものと考えられる。シュタイナーはさらに、霊的本性は、生死を越え「私」だけの霊的姿勢を受け継ぐと説明する。すなわち1人の霊的人間は輪廻転生をし、再び同じ霊的人間が異なった肉体を通して再成されるのである。つまり、人間の霊は、行為により自己の運命を作り、過去の行為が現在の結果に結びつくという因果律により支配されていると言うのである。シュタイナーは「精神(霊)」「魂」「肉体」の関係を次のように結論付けている。「霊は不滅である。誕生と死は物質界の法則に従って身体を支配している。運命に従う魂のいとなみはこの世に生きる間この両者に関連を与えている。そして、輪廻転生や因果による運命法則の観念は、この真理が、思索する理性の中で輝くことができるのも事実である。」¹¹⁾このように、シュタイナーはプラトンの主張と同様に、霊のみが死を越え、意志として未来に継承していくととらえている。それ故人間の3つの部分の中では霊のみが究極の本質となるが、霊を霊たらしめる魂の働きを非常に重視している。肉体と霊の間で、すなわち低次の物質的現象の部分と、絶対的普遍の部分の狭間で揺れ動くものこそ、人間の実際的ないとなみを左右する「自我」の属する部分であり「私」の担い手なのである。シュタイナーの、超感覚的認識を獲得する方法は、この「自我」を強化することにあるが、この点で東洋的な「我」を滅する方向にある人間観と相違があると言える。シュタイナーは以上のような人間観を、見者としての透徹した認識を通して獲得したが、その人間観が、古代ギリシャの人間観に、また東洋的な人間観にも通じるものがあるという事実は、時代を貫く確実な人類の叡智の継承があることを感じないわけにはいかない。

循環昇降論

東洋における最古の宇宙論・人間論は「易」において確立し、この陰陽概念は、老子・孔子といった聖人が取り上げ、現代まで様々な形に発展・展開されていった。老子において、42章に「道が一となり、一が二となり、二が三となり、三が万物となる。」とある¹²⁾。また、40章に「天地万物は、有より生ず、有は無において生る。」¹³⁾とある。老子にとって道は、万物の始源であるが、それは無と有を表している。無は始源としての道であり、有は働きとしての道である¹⁴⁾。老子は易的循環に万物の生成をみたのは明らかであるから、無は有を包含し、始源としての無は、働きとしての有より先に存在することになる。すなわち、老子における無は易における太極と一至する。そして「一が二となり、二が三となり、三が万物となる」とは、太極が大陰と大陽に分極し、この二極はそれぞれ2つに分化し、四象を形成する。そして四象はさらに2つずつ分化し八象を形成するという、易における八卦の概念と一致する。この一連の生成過程はすべて道の働きであり、これは万物に浸透し内在することになる。古代中国には、デカルトの二元論とは性質の異なる、理気二元論¹⁵⁾が存在していたが、最後に生成される万物を分離すると次の3つの段階に分けることができる。すなわち、万物を生み出す始源・太極・無は、絶対的普遍の真理を有している「理」という概念でとらえることができる。次に、陰陽の働きによる創造の過程は、絶えず変化し流転して定まることのない、働きとしての「気」という概念でとらえることができる。そして「気」の様々な働きにより万物である様々な現象を生み出す。これを「象」という概念でとらえることができる。この三者の関係は「理」「気」「象」の順に、高次な超越的理念(イデア)・道の内在的目的(エンテレケイア)の移行が最下の物

質的感覚的自然現象界に至る生成の過程を示している。この循環昇降論は、古代インドにおいて、高次なものから「如来性」「世界性」「衆生性」として表わされ、また古代ギリシャのアナクサゴラスがとらえた¹⁶⁾「ヌース」叡智が「理」に対応し、「プシュケ」精神は「気」に対応し、「ソーマ」資料は「象」に対応すると考えられる。このように「理」「気」「象」の三段階の循環昇降論は、西洋・東洋の壁を越え、様々な世界観の中で宇宙的秩序として実感されてきたものだと言える。そして、この展開は現代における様々な学問・自然科学等のマクロコスモス・ミクロコスモス・超心理学・原子論へと継承合一していくものと考えられる。

以上、万物の生成から「理」「気」「象」の関係と働きを考察したが、人間も万物の中に含まれる以上、この秩序は人間にもそのまま適合することになる。宇宙と人間との関係がマクロコスモスとミクロコスモスとの関係としてとらえられる所以である。すなわち「理」に対応する人間の核心は「霊」、^心「気」に対応する部分は「心」、^魂「象」に対応するものは「体」となる。

「霊」は「理」と源を一とするわけであるから、永遠不滅・絶対的真理を把握している。「心」は絶えず揺れ動く感情・欲を司る。この「心」は古代中国の人間観において「魂魄^{コンバク}」として2つの役割を担っている。ウィンチット・チャンによれば、「魂」は陽気で人の生命力「気」であり、人間の知性や呼吸能力を表現し、「魄」は陰神であり、人間の肉体やその形骸の運動について表現される¹⁷⁾と説明される。つまり「魂」は陽の心であり、「霊」に近い秩序に基づいた善なる思考を知っていると考えられる。一方「魄」は陰の心であり、「体」肉体に近い低次の欲望にかかわる悪なる思考を持つととらえられる。「魂」と「魄」は互いに影響し合い様々

表1. マクロコスモスにおける循環昇降論と
ミクロコスモスにおける三分説の人間論との相関

相関	地域性	次元	無限的レベル	絶対的レベル・流転的レベル・現象的レベル
循環昇降論	古代中国	無		理 ・ 気 ・ 象
	古代インド			如来性 ・ 世界性 ・ 衆生性
	古代ギリシャ			ヌース(叡智)・プシュケ(精神)・ソーマ(資料)
三分説の人間論	古代エジプト	無		Ka(幽体)・Ba(精霊)・Set(肉身)
	プラトン			理性 ・ 気概, 欲望 ・ 肉体
	R・シュタイナー			精神(霊) ・ 魂 ・ 肉体
	古代中国			霊 ・ 魂魄(心) ・ 体

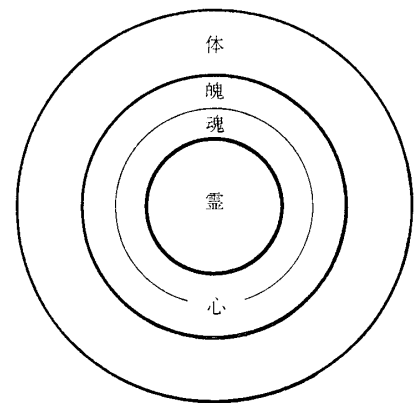


図4. 古代中国の人間観

な人間感情を生み出すが、絶えず陰陽定まらない揺れる心を表わしている。そして「体」は物質的肉体を示している。この古代中国思想に流れる人間観を図4に示した。

以上の考察により、「理」「気」「象」の循環昇降論は、今まで述べた三分説の人間観と、ほぼそのままの構造で対応することが明確となった。その関係を表1に示した。この表によれば、マクロコスモスの秩序が、ミクロコスモスとしての人間に、そのまま働きの構造として具現化している。そして表1におけるKa・理性・霊・精神という、人間の絶対的レベルに位置する部分は、永遠不滅の存在として、現象的レベルのSet・肉体・体や、流転的レベルのBa・魂・魂魄が消滅しても、永遠に生き続けることになる。この、霊の不死性が東洋的転生論の根拠と

なるのである。

転 生 論

「霊」の不死性は転生論の根拠となるが、転生の原因である輪廻の種子について考察してみよう。ルドルフ・シュタイナーは、彼の転生論の中で、「魂が、人間の過去の諸体験を記憶し、それを霊に送り込む。そして霊は、行為により自己の運命を作り、過去の行為により現在の結果を得るという因果律が、転生の法則である¹⁸⁾。」と述べている。この転生の法則は、仏教的人間論における唯識思想の中に見い出すことができる¹⁹⁾。この唯識説は、輪廻生存の種子が、すべて人の一心に基づき、その心の、過去の業を背負ったものとして、識として生起すると説明する。この識が阿頼耶識という深層心理に属する概念であり、その働きから一切種子識とも呼ばれるように、過去の経験という種子の貯蔵する場所という意味を持っている。すなわち人間は無限の過去から、輪廻転生を通して、すべての経験を業（カルマ）として内なる阿頼耶識に刻印しているのである。この、阿頼耶識に貯蔵された種子は、「因」となり、過去の経験の結果としての「果」を生み出す。つまり、因果律という1つの原理により輪廻転生が繰り返されるのである。輪廻する人間は、過去の経験によるカルマの結果としての現在の生を生きており、また、今行う行為により、新たな未来への種子を阿頼耶識の中に刻印していることになるのである。そして、ある一定の段階まで、つまり、人間の核心としての霊が、理に基づいた行為による経験を通して、純善化するまで、この転生のサイクルは続くのである。純善化、つまり悟りであり解脱は、霊が四生六道の輪廻から逃れることを意味し、霊の純善化が成った時、人は仏となるのである。これが仏教的人間論における神人同格教なる汎神教的側面としての極致である。

さて、この輪廻の思想は、古代インドにおけるウパニシャド学派²⁰⁾の中心教理の中にみることができる。すなわち、梵（ブラフマン）と我（アートマン）の合一が成れば、業（カルマ）・輪廻（サンサーラ）を解脱すると展開されている。また、既に述べた古代エジプトの人間観も、Kaの復活の思想であり輪廻の思想と同一のものと考えられる。そして、古代ギリシャのピタゴラス・プラトンも霊魂は不死であり、清まるまで流転すると解いている。さらに、シュタイナーの転生論における魂の働きは、唯識学で説明する²¹⁾、輪廻の種子を蔵する阿頼耶識の働きと一致している。このように、様々な三分説の人間論の中には、必ず転生論が組み込まれているのである。この思想は、宗教的理解というより、人間の核心である理性・意志の不滅性を強化する意味で、我々の行為に影響を与え得るものと考えられる。なぜなら、因果律という原理に添って、今の人の行為が、人の未来を決定し、さらには我々人類の未来が決定されるからである。我々が、現世という眼前の生のみで自分自身は消滅しないという人間観を持つならば、我々は、遠く未来を見据えた宇宙的視野による「理」に基づいた計画を、実際に可能にすると考えられる。

相対界と絶対界

以上の考察を通して、三分説の人間論と「理」「気」「象」の循環昇降論と転生論の3つの間には深いつながりが認められたが、ここで、易的宇宙論と照合して考察を深めたいと考える。

「易」と老子との関係については既に触れたが、近代ほとんど顧みられない易的陰陽論を高く評価し、実用弁証法として復活させたのは桜沢如一であった。彼の考え方²²⁾を基にした、万物・生命の生成過程を図5に示し、図5における、スパイラルの中央に向かうV字形の部分を図

6に示した。Ⅰは無限・太極の世界、Ⅱは陰陽双極の世界、Ⅲはエネルギーと振動の世界、Ⅳは素粒子の世界、Ⅴは元素の世界、Ⅵは植物界、Ⅶは動物界を示している。万物はⅠの無限の世界から図5の①→②の方向に物質化・現象化する。万物は人間も包含するから、人間の生命も無限の世界ⅠよりⅦまで7段階を経過し、スパイラルの最終点の一点において人間として誕生する。そして人間が死を迎えると、図5の②→③の方向に非物質化し無に還元していく。この①→②と②→③は陰陽論的に説明されるが、Ⅰの無限の世界については、その名を空・絶対・唯一者・虚空・全在・全知・全能・永遠・神・ブラーマン・アータマン・シュンニヤ・無限のサイクロトロン（記憶力、判断力、意志）²³⁾という概念が示す世界であると説明するに留まっている。この理由は、陰陽論が図6のⅡ～Ⅶの相対界における現象をすべて理論化できるが、Ⅰの絶対界の状況は絶対故に説明不可能になるからである。本論における三分説の人間論の考察に添うならば、霊・理性は、無に還元しても再び物質化・現象化することになる。そこで③→①を付記した。これにより、人間の本質部分の転生の概念はより明確となろう。また、この③→①はカルマを示すと言っても良いと思われる。

次に、Ⅰの絶対界・無限について人間論を通して考えてみよう。Ⅰの世界を、既に述べた循環昇降論と照合すると、「理」の世界と一致する。しかし、「無限」＝「理」とは必ずしも成立しない。つまり「理」を生み出す、もう一回り奥にあるカテゴリーが想像される。古代ギリシャにおける、「ヌース」叡智を生み出す「トーヘン」一者なる概念に相当するが、これは、あらゆる人間論の中で、人格化された一柱の全智全能の神的存在という概念に統括される。しか

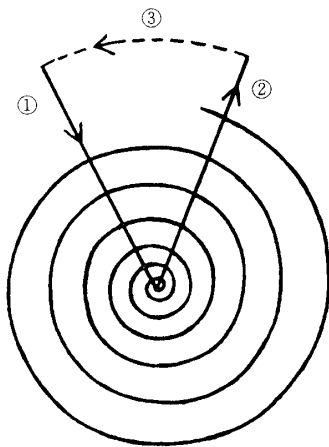


図5. 創造・生命のスパイラル

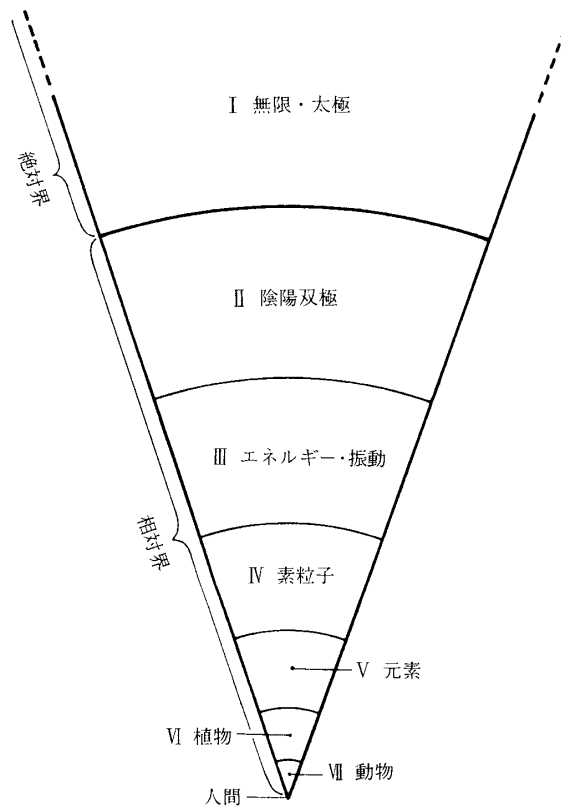


図6. 宇宙の秩序

しこの概念は、様々な宗教的背景の基にキリスト教的な神人懸隔教的側面と仏教的な汎神教的側面、キリストがみた父性と老子がみた万物生育の母といった、対立的な原理を内包することになる。ここで、この対立原理を陰陽論的に考察するならば、無限・トーヘンとは、男性原理・女性原理を包括し、また神人懸隔教的側面と汎神教的側面を有し、すべての人間の人智を超越した姿として想像することはできる。しかし今日まで、無限・トーヘンについて明確にした人間論・宇宙論は存在していない。様々な人間論・宇宙論は、それぞれの文化的・地域的・時代的背景の基で、真理の一側面として、無限・トーヘンの様々な側面を示していると考えられるが、我々はまだ、その統括的な全体像を把握していないし、おそらくそれは不可能であろう。しかし、真理は様々な人間論の中に部分的側面として示されているはずである。ここに着眼するならば、様々な人間論の底に流れる真理は、すべてを寄せ合わせるのではなく、それぞれの人間論に内在する真理の側面が、徐々に集まり総合的に全体像が明らかになるのではないかと考えられる。本論では、宗教的認識で、無限・トーヘンの概念を明らかにすることを目的とはしていないが、「理」を生み出す源には、人智を越えた絶対的存在、あるいはエネルギーが必要であるという考え方は、様々な人間論を考察しても不自然ではないと言えるだろう。また、人間は愛するという行為を知っている。ガンジーが最も大切にした、この愛が、プラトンが言うように人間の理性から生ずるものならば、理性と源を同じくする宇宙は愛に満たされていることになる。つまり、無限・トーヘンは愛を生み出す源泉である。ここで、人間が様々な人間論・宇宙論の中に人格化された神的存在の姿をみたことは容易に理解される。すなわち人間は、無・トーヘンに対して無機的な冷たいイメージより、有機的な暖かいイメージを求めてきたと言えるだろう。

さてここで、シュタイナーが言う、人間の本質である霊が2つのものを担っているという点²⁴⁾に着目したい。1つは真善の永遠の法則であり、もう1つは過去の諸体験の記憶である。後者は唯識論における第八識（阿頼耶識）に貯蔵されるが、前者がどこから来るかを考えるならば、それは、「理」を生み出す絶対界から生じることになる。つまりそれは阿頼耶識の奥に在る第九識（阿摩羅識）にあると考えられる。阿摩羅識とは、無垢識・清浄識と訳され、阿頼耶識が迷いを捨てて悟りの姿に転換した清浄な位に付けられたものであると説明される²⁵⁾。すなわち、我々の心の最深部は、迷妄を離れた純善な真理を自らで蔵しているのである。つまり、人間が自らの深層真理の奥に「理」を生み出す、無限・トーヘンの記憶を持っていることになる。この考え方を受け入れるならば、人間の性善説が成立するが、阿頼耶識には、過去の行為の記憶がすべて刻印されており、当然ながら悪なるものも人間の本質部分の霊に含まれることになり、性善説は必ずしも成立しない。ここで転生という概念で、過去生を溯るならば、人間の究極の存在は「理」に満たされた善なる姿となるだろう。ここで真の、人間の性善説が成立する。しかし、今の人間は様々な生を繰り返すことにより、欲望・悪なる行為がカルマとなり、しだいに理性本来の善なる絶対性を見失ってしまった存在なのである。ここで「私」の担い手である「自我」の問題に触れなくてはならない。

自 我

ルドルフ・シュタイナーが主張する、人間の三分説は、「自我」を中核とした、人間の本質を7つに分ける見方に展開されることは既に述べた。この考え方において、「自我」を「理」「気」「象」の循環昇降論に当てはめれば、それは「気」の部分に属することになる。すなわち「自我」は、流動的変転的性格を持ち、真理を指向しながらも低次の肉体的欲望との狭間で、絶えず揺

れ動く存在なのである。シュタイナーの人間追求は、この揺れ動く自我の克服と強化により、高次の世界の認識を獲得していくという立場である。これに対して老子は「理」にそった生き方としての道を教えるが、道には個人の「我」は見当たらない。「我」は滅し去るものであり、自然の中に同化還元させるものとみている。老子における人生は、人が幸せになる為に全力を尽くす道であるが、その徳目が達成された時には老子の姿は消えている。つまり、自己主張は皆無である。そして道の先に天の道が存在し、その先に究極の世界が開けて来るのである。このように、道の上には、どこにも個人の「我」は存在しないし必要としないのである。

シュタイナーは、西洋的に陽の指向で精神世界を探索し、自我の強化により、物質的世界にかかわる低次の魂・肉体を制御し、乗り越え、より高次の精神世界に登ろうとする。一方、老子は東洋的陰の指向で、自分の「我」を泰然として消し去り、道を歩み、ふと気が付けば太極の域に到達している。この二者の対立を陰陽論的にみるならば、最終的には陰の世界は陽の世界を包含するから、東洋的精神論は、西洋的精神論を包含し、調和の基にいずれ一本化することになるだろう。この「我」に関する問題を、東西両方向・陰陽両面の調和的・発展的人間論としてとらえるならば、次のように考えることができる。人間は、自分という小さな殻に固執する偽我を捨て去り、真理を把握している内なる真我を強化する生き方、換言すれば、低次の欲を司る小さな自己愛を捨て、すべてを愛する大愛を持った思考と行動が支配する、理性的な生き方を選択して初めて、ガンジーが最も大切にした「真理と愛」が、すべての文明の基盤となることが実感されるのではないだろうか。

結 語

人ともとの調和のとれる関係を探る為に、精神的側面と物質的側面という二面に着目し、その根本問題として、様々な人間論に内在している人間の三分説と輪廻の思想を通して、人間の本質について検討を行った。その結果、真理を把握している「霊（精神）」、感情・感覚・欲を司る「心（魂）」、物質的要因としての「体（肉体）」という人間の3つの構造は、東洋的宇宙論における、絶対的普遍の秩序である「理」、陰陽双極の流動的変転する「気」、物質的現象として表れる「象」という循環昇降論に、そのままの関係で対応していることが明確となった。三分説の人間論に添えば、人間の「霊（精神）」のみが「理」に対応し、絶対的普遍の真理を把握しており、これは、時間・空間を越えて永遠不滅なものとして位置付けられる。我々が、この人間の三分説を受け入れるならば、眼前の現実に縛られることなく、宇宙的視野で様々な計画を「理」に基づいて実行できるであろう。

ここで、人がものを創造しようとする時、2つの人間的態度が要求されるであろう。1つは様々な現象「象」の裏に流れる「気」の陰陽双極の働きを感じ取り、さらに、流転していく「気」の奥に存在する、永遠不滅の秩序である「理」を把握しようとする意志を持つことである。そして「理」を見据えた道が歩めるならば、「理」を生み出す「無」の世界から、創造の為の無限の可能性を引き出すことが可能となるだろう。なぜなら「無」は無限であり、真理と愛に満ちており、それは「理」「気」を通して最後に「象」として具体的な形として現われてくるものだからである。つまり「理」「気」「象」という、宇宙の循環昇降論を逆に、「象」から「気」へ、「気」から「理」に遡る行為が、創造の為の、普遍の真理の秩序を探るアプローチであり、その秩序に添った創造は、宇宙の超越的イディアを内在することが可能となるだろう。

もう1つ要求される態度は、ガンジーの言う「愛」の実践にあると考えられる。「理」は真理の秩序だが、冷たい理性ではないはずである。自己という小さな殻に固執する自己愛のレベ

ルでは、人は「理」を見据えることは不可能であろう。偽我を滅し去り、真我に目ざめ、すべてが調和し、あらゆる壁を越える大愛への指向が必要となるだろう。

以上に述べてきた、宇宙的秩序を探るという理性的側面と、大愛という暖かい人間的側面が調和する時、人が創造するものは何物をも犠牲にすることなく、すべてと調和すると考える。

文 献

- 1) アレキシス・カレル『人間この未知なるもの』 桜沢如一訳 1984 日本C I協会 p. 268～269
- 2) S・ラダクリシュナン他『世界の人間論Ⅰ』 勝部真長他編訳 1978 学陽書房 p. 5～7
- 3) 嘉門安雄『西洋美術史要説』 1986 吉川弘文館 p. 13
- 4) ジョン・D・ワイルド「ギリシア思想における人間観」(S・ラダクリシュナン他編『世界の人間論Ⅱ』) 1978 学陽書房 p. 8～56
- 5) 前掲書4) p. 33
- 6) 前掲書4) p. 34
- 7) 上松佑二『ルドルフ・シュタイナー』 1980 PARCO 出版 p. 16
- 8) 前掲書7) p. 16
- 9) R・シュタイナー『神智学』 高橋巖訳 1979 イザラ書房 p. 62
- 10) 前掲書9) p. 73
- 11) 前掲書9) p. 94
- 12) 原富男『老子』 1969 春秋社 p. 60
- 13) 前掲書12) p. 58
- 14) 大濱皓『中国古代思想論』 1977 勁草書房 p. 41
- 15) 丸山敏秋『気—論語からニューサイエンスまで』 1987 東京美術 p. 42～47
- 16) 北嶋美雪他『哲学 6 物質 生命 人間』 1986 岩波書店 p. 48
- 17) ウィンチット・チャン「中国思想における人間観」(前掲書2) p. 120
- 18) 前掲書9) p. 94
- 19) 高崎直道『仏教入門』 1983 東京大学出版会 p. 173～186
- 20) P・T・ラジュ「インド思想における人間観」(前掲書2) p. 172～174
- 21) 高崎直道「唯識・如来蔵思想の人間観」(前田専学編『東洋における人間観』) 1987 東京大学出版会 p. 335～345
- 22) 桜沢如一『宇宙の秩序』 1982 日本C I協会 p. 118～119
- 23) 前掲書22) p. 118
- 24) 前掲書9) p. 73
- 25) 総合佛教大辞典編集委員会編『総合佛教大辞典(上)』 1987 法蔵館 p. 23